

2023 年度 ベトナム研修 報告書

医療科学部 放射線技術学科 3 回生 伊勢 彬

〈 研修概要 〉

2024 年 2 月 25 日から 3 月 7 日までの 12 日間、ベトナムでの海外研修に参加しました。ホーチミン市ではチョーライ病院、タンアン一般病院で病院実習を行いました。フエ市ではフエ医科薬科大学の学生と国際交流をしました。

〈 研修参加の目的 〉

本研修に参加した動機は、診療放射線技師として働く姿が想像できず不安に感じたことです。日本よりも実地訓練に近い内容を病院実習にて受けられ、臨床で働く診療放射線技師の方々をより間近で感じることができると知り、自身が求める診療放射線技師像が描けるかもしれないと思い本研修に参加しました。

〈 研修で学んだこと 〉

＜チョーライ病院＞

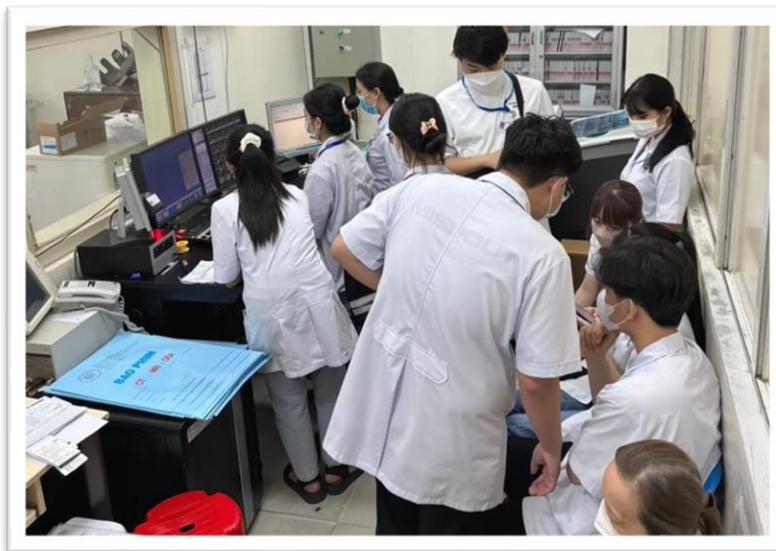
チョーライ病院で初めに目にしたのは大勢の患者さんでした。チョーライ病院はベトナム南部の基幹病院として全国から多くの患者さんが来院され、多くの検査を正確かつ可能な限り早く終わることが求められる状況でした。研修中、霜村先生に「医療施設に求められる役割を理解し、限られた医療資源を活かし現場を支えている方々を知れば、日本と比べて優劣だけでない観点にて物事を捉えられる。」とアドバイスをいただきました。日本との表面的な違いだけに注目するのではなく、各地域、社会が求める需要に対して医療施設が果たす役割とそこで従事される方々を見て学ぶことが、本研修の重要な要素の一つであると気が付きました。



▲検査の様子

チョーライ病院では多くの患者さんの検査を実施することが求められていました。検査室内に次の撮影予定の患者さんを入室させ、そのまま撮影を行うことで検査時間を短縮させていました。さらに、患者さんを車椅子から検査台へ移動させる際、患者さんの家族の協力を得ることで医療従事者の負担を減らしていました。たくさんの検査を実施するために生じた効率的な対応であり、患者個々の医療被ばくや安全の確保を日本同様に実施することが難しい状況でした。しかし、その様な効率化がたくさんの検査を実施可能とし、結果的に多くの患者さんの命を救っていることを知りました。そのような状況下でも、忙しさとは関係なく、患者さんと視線を合わせた会話や、検査中の声掛けなど、可能な限り不安を取り除くための寄り添った医療を提供されておられました。日本とベトナムの医療には様々な違いがありましたが、患者を中心に医療が存在する認識は共通であり、その重要性を改めて認識でき、貴重な経験を得ることができました。

さらに、チョーライ病院はホーチミン医科薬科大学の学生を受け入れ、病院実習の場も提供されていました。ベトナムの学生実習は、患者呼び込み、ポジショニング、照射までのすべての工程を学生が主体的に実施していました。自身が受けた実習と比べて実地訓練に近い雰囲気を感じました。遠く離れた異国の地で、頑張る姿を見て、信頼や安心といった感情と、自分も勉強を頑張らなければならないという焦りも感じました。この経験を忘れず勉学に本腰を入れて励んでいきたいです。



▲現地学生との交流

<フエ医科薬科大学>

フエ医科薬科大学では、国際交流と附属病院での実習をさせていただきました。学生交流では、両国の文化や医療について互いに発表しました。チョーライ病院でもスタッフの方々へ同様の発表をする機会がありました。自分はフエ医科薬科大学での発表を担当していたため、仲間のプレゼンを聞き客観的に発表方法を学ぶことができました。先のチームの発表から、分かりやすく発表するために、スクリーンを指差すなど体全体で表現し、ゆっくりと大きな声で発表することが重要であることが分かりました。100人以上の学生を前に発表することは、とても緊張しました。しかし、ベトナムの皆さんに良い発表であったと褒めていただき、仲間の発表から得た学びを実践してよかったと感じました。



▲学生交流

病院実習では、患者さんに対し様々なポジショニングを体験させていただきました。その中の一つである腰椎正面、側面のポジショニング時に、膝を揃えての軽度屈曲の工程が抜けていたことに気が付かず指摘をされました。この失敗から、実際にポジショニングする経験がなく、試験を通過するための勉強となっていたため、

正しくポジショニングが理解できていなかったことに気が付きました。学ぶ目的を把握し、臨床で利用する姿を具体的に想像しながら、今後は勉学に励みたいと思います。



▲ポジショニングの設定をしている様子

国際交流の一環で、双方の学生が混ざり各グループに分かれて「脊椎損傷患者の検査時における苦痛軽減措置」についてディスカッションをしました。私は具体的な方法が考えられず、脊椎損傷に対して、通常の動けない患者さんと同様に体の下にマットを敷き、マットごとストレッチャーから撮影台動かす方法しか思いつきませんでした。しかし、フエ医科薬科大学の学生たちは、患者さんではなく照射装置の方を動かすことで患者の負荷を抑え、検査時間を短縮する方法を提案していました。また、提案に際して診断可能な画像を取得することを常に意識した発言が多くあり、



▲ディスカッションをしている様子

、実地訓練により臨床現場を想像して問題を解決することができる経験を得ているのだと感じました。自分も患者さんの負担を減らすことを意識しながら病院実習に臨みたいです。

〈まとめ〉

本研修でベトナムの医療を学び、日本との共通点も多くあることが分かりました。ベトナムの病院では勤務されている医療従事者の方々だけでなく現地実習生たちも患者さんに寄り添った、患者中心の医療を提供していました。その姿から、自分が日本で二年生の時に受けた病院実習では、学ぶ事ばかりを意識し、患者さんに寄り添えていなかったことに気が付きました。四年生では本格的な病院実習が始まります。本研修で得た経験を活かし、ベトナムの学生のような患者さんに寄り添った医療を提供することができるよう努力していきたいです。

〈謝辞〉

お忙しい中、自分たちを受け入れてくださりご指導ご鞭撻くださったチョーライ病院、タンアン病院、フエ医科薬科大学の皆さんありがとうございました。また本研修を引率してくださった霜村先生、石田先生、松尾先生、水田先生、玉木学長、村上さん、そして事務の方々に御礼申し上げます。